より効果的な英語教育の実践を求めて

前台中日本人学校教諭
鹿児島県鹿児島市立伊敷中学校教諭　石塚　直貴

キーワード：英語教育、現地校、ICT、オールイングリッシュ、他者意識、本物志向

赴任校の概要（2021 年５月 21 日現在）
学校名：台中日本人学校（台中市日僑学校）
URL：http://tjs.ehosting.com.tw/
児童生徒数：小学部　107 人　　中学部　18 人

１．はじめに

私が勤務した台中日本人学校は、小学１年生から中学３年生までが在籍しており、日本国籍に限らず、台湾国籍や外国籍など様々な家庭環境の児童生徒がいる。全ての学年において週１時間の英会話や中国語の授業を実施している。また、年に数回の現地校との交流だけでなく、中学部では、現地校からの１週間の留学生受け入れや現地校への１週間の短期留学も実施しており、国際性を磨く環境が整っている。日本の鹿児島県で、約 10 年間、中学校英語教育に携わってきた私にとって、台湾においてどのような英語教育がなされているかは、とても興味深く、今後に生かすことができるものではないかと考えた。ここに、現地校での調査と赴任校での実践の概略を紹介したい。

２．台湾における英語教育の考え方

台湾の第一言語は中国語であり、日本人学校から一歩外に出てしまえば、中国語を介したコミュニケーションがほとんどである。そのため、英語学習は日本と同様の状況であり、英語の授業以外で英語を使う機会はほとんどない。しかしながら、実際に台湾で生活すると、飲食店やデパートなどで、英語が通じる場面が多い。また、町には「美語」と書かれた英語塾の多さに驚かされる。台湾人の友人に台湾の英語教育事情について尋ねたところ、台湾の歴史的背景や国際関係、そして島国という点から、他国とのビジネスをしなければならないという危機感があり、英語は使えて当たり前という考えが浸透しているとのことだった。そのため、学校教育では、実際のコミュニケーションを想定したやり取りや英語を用いて考えを深めようという意識が高いのである。

３．現地校での調査や赴任校での実践を通して

(1) 新民高級中学校での調査

新民高級中学は、台湾の台中市にある中学部・高等部が併設されている私立学校の一つである。特に英語教育に力を入れており、週に 10 時間程度の英語の授業を展開している。通常の英語の授業は、台湾人の教員が行い、英会話や英語表現（英語劇）の授業では、ネイティブの教員が行っている。全ての授業で、オールイングリッシュの授業が展開されており、日常的に英語を使う環境が整っている。ICT 機器も充実しており、各教室に、スクリーン、プロジェクター、パソコンが常設され、ボタン１つで、黒板前にあるスクリーンが自動で下りてくる。効果的な英語教育を考察するにはぴったりの場所と言える。以下、調査で得られた実践を紹介する。

１つ目は、言葉を視覚化する場面である。どの授業においても、最初の５～10 分程度、単語テストを行い、その答えを、スクリーン上に映し出していた。また、新出単語や表現の導入場面では、単語と一緒に、その対訳ではなく、その表現が持つイメージをセットで掲示することで、意味を文字で覚えるのではなく、イメージ

としてつかむよう工夫されていた。この考え方は、ワークシートにも表れていた。過去形の授業では、終末場面で、3 つの質問に対する自分の考えを英語で書くようになっていたが、文章だけでなく、そのイメージを絵で表すようにスペースが設けられていた。文字だけでなく、自分なりのイラストで表すことを習慣化する工夫であると感じた。

2 つ目は、映像教材を活用する場面である。その単元で関連する写真や動画を見せることで、生徒の理解を助けるだけでなく、思考を深める手段として活用していた。私が参観した授業では、「ライオンキング」の主題歌である「サークルオブライフ」を扱われており、歌詞の聞き取りを通して、リスニング力向上を図るような授業が設計されていた。ただ歌を流すだけでなく、映像もセットで流すことで、その歌の世界観をつかむ支援となるのはもちろんだが、「どうしてこのような内容なのか？」、「サークルオブライフの意味とは？」というように思考を深める機会としても活用されていた。また、生徒にとっても、その当時、「ライオンキング」の実写映画がリリースされた直後であり、とても興味を持ちやすい教材となっていた。まさに、オーセンティック（本物志向）であり、生きた英語を習得する時間となっていた。

歌詞の意味を考える生徒たち

3 つ目は、会話力向上を目的とした場面である。まず、教員が全員を起立させ、トピックである「良い習慣」と「悪い習慣」について質問する。生徒の答えの中には、「早起きは良い習慣」だが「遅くまで寝るのは悪い習慣」という意見が出た。すると、教員はその悪い習慣をよくするためにはどうすればよいかという質問を投げかけた。単純な問答で終わるのではなく、そこからさらに思考を深めるための問いかけをすることで、即興的に答える力や思考力を磨く時間となっていた。このように、自分の考えを英語で表現する機会を多くとることで、英語をただの知識として学ぶのではなく、自分の考えを表現できる手段として学ぶことができると感じた。

(2) 中科実験校での調査

中科実験校は、台中市にある国立学校の一つである。近年、中科実験校の高等部では国際クラスが新設され、英語の授業だけでなく、国語（中国語）を除く他教科についても、オールイングリッシュで授業を行うようになった。そのため、クラス担任もネイティブが担当している。このように、英語教育を今後の重要課題と捉え、力を入れ始めた学校の授業を参観することで、より効果的な実践を知るとともに、より高度な高等部の英語教育の実態を知ることで、私自身の資質向上にもつながると考え、高等部の英語の授業に関する調査を行った。偶然にも、授業参観を行ったクラスに、日本から高校生 10 名が学校間交流で授業に参加していた。彼らとの交流を目的とした授業内容となっていたが、とても興味深い内容となっていたので、その実践を紹介したい。

まずは、授業で扱う題材の大切さである。内容は日本と台湾における「タブーの違い」であった。題材の導入として、インドに赴任したアメリカのビジネスマンがその暮らしを通して文化やタブーの違いについて学んでいくという映像教材を用いていた。このような教材を通して、生徒たちは生きた英語を聞く機会を得るのはもちろんだが、本時の題材について容易につかむことができていた。その後、ワークシートを用い、具体的な日常生活の場面に対して、それが日本におけるタブーなのか、台湾におけるタブーなのか、どちらの国にとってもタブーなのかを個別に考察し、グループに分かれ、考えを共有する場面に移っていった。どの生徒も活発に意見交換をし，異文化理解を深めていた。授業設計をする上で扱う題材を選ぶのは教員である。自然と対話が生まれるような題材を扱うことで、英語を介してのコミュニケーションが随所に見られたことやお互いに知らない単語や表現があっても、それが伝わるように言い換えたり、身振りを用いたりと工夫が見られたことは大きな成果であり、改めて題材を選定することの大切さに気付かされた。

次に、座学にとらわれない授業環境の工夫である。自然と対話が生まれるような題材の工夫も必要だが、教

室という学びの空間を工夫することで、さらにコミュニケーションがしやすい環境を作り出すことが可能である。他言語を学ぶにあたって難しいのは、アウトプットである。静けさの中では、間違ってはいけない、間違うと恥ずかしいというような考えが先行してしまい、発言をためらうことが考えられる。特に、座学で行うと、それが発生しやすい。しかし、日本からの学生を歓迎するために、その課題をうまく解消するための工夫がなされていた。まず、題材が「英語で台中市の紹介をする」というものであった。それを、通常の机の配置で行うのではなく、いくつかのブースを設けることで、日本の学生たちがペアになってそれらを回り、すべての説明を聞くことができ、そこで質疑応答まですることができていた。また、発表中は、日本で人気のある曲がBGMとして流れており、歓迎ムードやリラックスできるような雰囲気が演出されていた。学習環境の工夫をすることも効果的な英語教育に向けての１つの手立てであると感じた。

(3) 赴任校での実践

台中日本人学校では、小学５・６年生、中学1～3年生の英語、そして、週に１回の英会話で中学部の基礎クラスを担当した。日頃からオールイングリッシュでの授業を心掛けており、指示や質問等、全て英語で行った。以下、日頃の授業で行った指導実践をいくつか紹介したい。

大半の授業を日本語で受けている生徒たちにとって、英語の授業への切り替えは容易なことではない。また、日本語でコミュニケーションが図れる生徒同士が、英語の授業では英語で話すことを基本とするには、導入の時間で、英語の世界に引き込む必要がある。教師とのスモールトークは有効な方法だが、より効果的なのが英語の歌である。切り替えだけでなく、自然な発音や使える表現の習得、さらには、家庭学習でも、自ら英語を学ぼうとする意欲を高めることができた。生徒たちが歌うことに慣れるまでは、月の歌という形で、月ごとに新しい歌を導入していたが、慣れてくると、3週間に１回、2週間に１回、そして、週の歌という形で、週ごとに新しい歌を導入した。生徒たちの意欲向上だけでなく、授業のリズムを作るという面でも効果的であった。

次に、オーセンティックさ（本物志向）を意識した活動である。英語の授業における表現活動として、即興的な対話活動、スキット（寸劇）、そしてスピーチなどがある。これらは、生徒たちの話す力を伸ばすだけでなく、表現力を磨く時間ともなる。まず、即興的な対話活動では、教師と生徒たちによるスモールトークや生徒同士の１分会話などに取り組んだ。英語でのあいさつ後、学校生活に関連した話や流行りの話題、時事的なニュースなど、生徒の実態に合わせた話題でスモールトークに取り組んだ。次に、生徒同士の１分会話では、生徒同士が Q&A 形式のやり取りから会話をスタートし、その話題について詳しく話してもよいし、関連するトピックから話を広げても構わないという条件で、1 分間の対話活動に取り組ませた。また、ペアを１分ごとに変えることで、より多くの人との対話ができた。開始時の質問は、「週末の予定や休みにしたこと」から「将来行きたい国や携帯電話は必要かどうか」など、教師側が決めたものでスタートさせた。毎回の授業で、このような対話活動に取り組ませることで、実際に英語を使ってコミュニケーションを図ることの楽しさやどうすれば相手に伝わるかなど、話す力の育成につなげることができた。

スキットを演じる生徒たち

スキットでは、生徒たちが習得した表現を用いて、オリジナルの寸劇を作成させた。例えば、日常生活で使える新出表現を導入後、展開部分でモデル対話の練習や対話文を部分的に単語や表現を変えて練習する。その後、ペアに分かれて、オリジナルの台本を作成し、全体の前で披露するといった流れである。また、iPad を用いて、内容に合わせた背景を映し出したり、衣装や小道具を用いてより臨場感のある雰囲気を演出したりと、オーセンティックさを意識した活動を目指した。スキットは２名で行うことを基本としたが、このような創作活動を積み重ねていくと、3名、4名と人数を増やし、より創造的な内容の英語劇へとレベルアップさせることもできた。さらに、スカイプを用いて、アメリカのシアトルに住む元 ALT（外国語指導助手:Assistant Language Teacher）

や日本の小中学校と交流した際には、実際に話したことのない相手と英語を通してコミュニケーションを取る機会となり、より実践的な学習につなげることができた。最後に、スピーチでは、iPad とロイロノート（ロイロノート・スクール）を活用し、プレゼンテーション形式で、自分の考えを英語で発表する機会を設けた。スピーチの構成としては、「導入・具体・結論」をベースに考えさせ、観客を魅了するような内容や身振り、アイコンタクト、そして強調などの表現技法を意識させた。そして、年に１回、中学部全体でスピーチコンテストに取り組ませることで、それまでの学習成果を発揮させる場面を設定した。テーマは、中１が「他己紹介」、中2が「将来の夢」、そして中３が「自分の意見」である。異学年が合同で行うことで、様々な創意工夫がなされたスピーチを聞く機会となったり、自分の考えを多くの観客に披露する機会となったりと、多くのメリットを生徒たちが実感する時間となった。また、小６にも参観させたことで、中学部の英語学習に対しての具体的なイメージの共有にもつながった。

４． 効果的な英語教育の考察

現地校での実践から学んだことは、ICT 機器を効果的に用いることの必要性や、より実際のコミュニケーションに近い教材や題材を用意することの大切さである。オーセンティックな教材は生徒たちの興味関心を引くだけでなく、より実践的な英語力の育成につながる。さらに、日頃から単純な英語での問答で終わらせるのではなく、生徒一人ひとりが考えをアウトプットする場を意図的に作り、多少のつまずきはあっても、その練習を継続させることが、真の英語力向上につながるのだと考える。英語を使って何をするのかという目的意識も大切さである。英語は他者とコミュニケーションを取るために、自分の考えを表現するためのツールの１つである。それを踏まえ、自分たちの生活に関連する問いや文化の違いに関する話題、日常生活を意識した英語劇の作成など、英語を発したくなるような場面をいくつも設定することが必要である。勤務校での実践でも感じたことだが、英語でコミュニケーションが取れたり、自分の考えを表現できたりしたときの生徒たちの表情は、達成感に満ち溢れたものである。

台湾赴任で得た経験を今後の教育活動にも生かしていきたい。